

目を開けると、そこは駅のホームだった。

空は闇につつまれ、目の前には現実離れた華美な装束に身を包んだ少女がふたり立っている。

「さやかは……？ おい、さやかはどうした？」

「逝ってしまったわ…… エンカンノコトワリに導かれて」

あれは、佐倉杏子と巴マミ？ なぜ彼女たちがここに……

「希望を求めた因果がこの世に呪いをもたらす前に、私たち魔法少女は消え去るしかない…… あなただって、判っていたはずでしょう？」

「……ハカヤロウ。やっと友達になれたのに……」

自分が手に何かを握りしめていることに気づく。手元に目を落とすと、細いピンク色のリボンがそこにあつた。

そうだ。まどかは……

自分がなぜここでこうしているのか。死んだはずの佐倉杏子と巴マミがどうして目の前に居るのか。まどかのリボンがどうして手元にあるのか。

全ての事実が私の脳裏に押し寄せる。

「……まどか……!!」

手の中に残ったこのリボンは、いまやまどかがこの世に存在したことの唯一の証明。名前を呼びながらリボンを胸に抱くと、自然と涙が出た。

「暁美さん……？」

私の様子がおかしいことに気づいたマミが近寄ってくる。

「まどかつて、誰？」

その問いに、私は何も答えられず嗚咽を漏らすしかなかった。

「暁美さん、落ち着いた？」

「……」

マミに背中をさすられながら駅のホームのベンチに座る。杏子は私のことになんか構ってられないようで、一言断ると先にこの場を後にしていた。

まどかを救うための繰り返しの日々での絶望的な戦い。その最後に待っていた衝撃的な結末。全ての魔法を消し去り、自らは概念となってこの世から消えていったまどか。

「ゆっくり泣きなさい…… 大丈夫よ、私が付いてるわ」

感情を整理できずただしゃくり上げる私を、マミは私をその豊満な胸の中に抱きしめる。彼女の温かい胸の中で、私はしばしばまどかを思つて涙を流す。

「美樹さんは願いを成就させたわ。彼女にとってはあれで本望だったはずよ」

「……美樹さやかがどうかしたのかしら？」

だいぶ落ち着いてきたところで掛けられた一言に思わず首をひねった私を、マミはまじまじと見つめる。

『美樹さやか』って何よその呼び方。暁美さん、あんなに美樹さんと仲良くしていたじゃない？」

仲良く？ 私が？

内心の混乱が顔に出たのだろう。マミが眉をひそめる。

「ごめんなさい…… ちょっといま、頭が混乱してて……」

とっさに出てきたのはそんな下手な言い訳だった。

それきり口ごもる私を、マミは不審そうに見つめるのだった。

「ひとりにしてしまつて大丈夫？ なんなら私の家に……」

「いえ、大丈夫よ」

玄関のドアを閉め際、マミが心配そうに私を誘う。それを断つて私は家の中に独りになった。

記憶にある住所に家があるかどうかがまず疑問だったがそれは杞憂だった。ひとまず落ち着いたあと、わたしの家を知っているらしいマミに送られて到着した場所は前の世界で住んでいたのと寸分違わぬ私の家だった。

そもそもなぜマミが場所を知っているのかという疑問はあったが、それよりもいまこうして部屋の中を見回して覚える違和感の方がもっと重要だ。

「銃は……？ 爆弾はどこなのよ」

前の世界ではたくさんため込んでいたはずの銃器や弾丸、爆弾はいくら探しても見つからなかった。いったいこれはどういうことなのだろう。

家中の物入れを探索して不毛な結果に終わり、私はリビングの真ん中のソファーに身体を沈めてため息をついた。

「どうなってるのよ……」

もしかして私は銃器を使って戦うようになる前の段階まで巻戻ってしまったのだろうか。まだかによつて再構成されたのならその可能性もある。

「ひとまず変身して、確かめてみるしかなさそうね……」

独りごちた私はポケットの中に入れていたソウルジェムを取り出す。これだけは、いつでも形は変わらないようだった。

軽く念じるとソウルジェムから溢れた光が私の身体を包み、一瞬の後に私の全身は着慣れた魔法少女の衣装に変わっていた。あの繰り返しの日々の中でそれこそ数え切れないくらいなんどもやったことだからもうすっかり身体に染みついている。全身の調子は問題なし。ソウルジェムの濁りも許容範囲内。そこまで確かめたところで、目の前の姿見に映る自分の魔法少女姿が何か足りないように思える。

「あれ……？ どうして……？」

私の能力に不可欠な、時間停止のための砂時計が組み込まれた小さな盾が左腕に無いことに気づく。変身のやり方を間違ったのか？

いや、部分的に変身したり装束の一部だけ出したり入れたりするなんてことはかなり難しい。言葉では表現しづらいくれど、魔法少女の変身とはそういうものではない。

では私は、もう時間を止められないの？

それでは何も攻撃の手段が存在しないではないか。時間停止とゴルフクラブだけで戦っていた一番最初の頃よりひどい。

まどかを救う願いで魔法少女になったから、そのまどかが存在しない世界では能力がなくなるのだろうか。だが、それなら魔法少女に変身できるのはどうして……

頭をひねっても何もわからない。これはもう、この再構成された世界の「晁美ほむら」がどう戦っていたのかマミや杏子に尋ねるしか無いだろう。

(家の中で変身するなんて、どうしたんだい？ 晁美ほむら)  
「……っ!!」

急に頭の中に響いた声。感情をまったく感じさせない平坦な調子が私の心の奥底の憎しみを呼び起こす。

(君の家で魔力を感じたから何かトラブルでもあったのかと思っただけで来てみたけれど、ひとりで変身してあげく鏡で自分の姿を眺めているなんて、まったくわけがわからないよ)

「キュウベえ……っ!!」

世界が再構成されても魔法少女が存在すると言うことはキュウベえの存在も予期してしかるべきだった。無意識のうちに銃を盾から抜こうとして改めて私は盾がないことに気づく。

(君くらいの歳の子は一般的に着飾るのが好きみたいだから、無理には止めないよ。確かに魔法少女の装束は自分の理想が反映されるから気に入った格好だろう。でも、変身を維持し続けるだけでもソウルジュムはほんの少しづつ溜っていくからあまり褒められた行為じゃないね)

窓枠の上に乗ったキュウベえが表情をまったく変えないまま

首を傾げる。この不気味さ、まどかが世界を再構成してもそのままなのか。

このまま張り合っても仕方がない。変身を解こうとしたところで、私は自分の手の中に潜む何か不思議な力を感じる。

「何かしら、これ……？」  
(どうしたんだい、ほむら?)

キュウベえをよそに私は感じるがままに手の中に力を集中させる。初めての行為のはずなのに不思議と慣れがあるのは、この世界の「晁美ほむら」がいつもやっていたことだからか。無意識のうちに身体が動くに任せていると光と共に手の中に弓が現れる。それはいつか、まどかが使っていたものによく似ていた。

初めて持つはずなのに不思議とその弓は手になじんだ。スムーズに私は弓を構えると手の中に光の矢が出現する。身体が覚え込んだ動作で私は自然に光の矢を弓につがえ、キュウベえを狙い――

(ひどいなあ。僕を狙うなんて。なにか君の感情を害するようなことをしたかい?)

「……いえ」  
そこまでしたところで自分のやっていることに気づく。かぶりを振り、私はキュウベえから狙いを外すと一呼吸で変身を解いた。

(晁美ほむら、今日の君は少々精神的に動揺しているようだね)